ヨワイマホウツカイ

龍急

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヨワイマホウツカイ

【Ｎコード】
Ｎ１０８９Ｙ

【作者名】
龍急

【あらすじ】
この作品はネギまの二次小説です、しかし基本的に主人公はプラスαみたいなキャラで本編キャラとなんとなく一緒にいるようなキャラですのでネギまの本編が大幅に変わることはありません、ご了承ください。（※転生ではありません、トリップでもありません、最強でもありません、アンチもたぶんありません、チートもたぶんありません、ラブコメはしたいと考えてますができるかわかりません、基本的に自己満足なので無いことばかりです、それでも読んでいただければ光栄です

意味のないプロローグ

魔法使い

鬼やドラゴンを一撃でなぎ倒し、
どんな傷でも一瞬で治療ができる。
誰よりも強く、
誰よりも優しい
それが魔法使い。

嘘

今のは嘘だ。
そんなこと、誰にでもできるわけじゃないんだ。
少なくとも僕にはできない。

魔法が使えるからって期待するなよ
魔法が使えるからって何でもできるわけじゃないんだよ
たかが魔法だ、
火が使いたいのなら道具を使えばいい。
強くなりたいのなら武術を習えばいい。
人を殺したいのなら武器を持てばいい。

たったそれだけのことなんだ
不可能を可能にすることなんてできない。
不幸を幸福にすることもできない
絶望を希望に変えることすらできない

幻滅したかい？　不愉快になったかい？

そんなもんだよ魔法なんて
そんなもんだよ世界なんて

決して平和ではなく
決して強くなく
決して優しくない

しかし、悲観することでもない

だからこそ平等で
だからこそ努力して
だからこそ美しいのだから

まぁ所詮は戯言だけど

忘れてくれてもいい
心に残してくれてもいい

たかが一人のガキが、
社会も知らないただのガキが勝手にほざいてるだけなのだ。

伏線が多い第一話

家族が大切です、特に妹

突然だが家族の話をしよう。
母は事故で死んでしまったが今でも尊敬している。
父はだらしないが大学の教授で実は頼りになる。

そして元気を三回言っても、たりないくらい元気で可愛い妹がいる。

本当に可愛い、
妹じゃなかったら口説いているくらい可愛い、
あえて表現するなら子犬みたいな感じで可愛い。
無論、妹に手を出すほど落ちぶれてはいないが彼氏ができた時は全力でガンを飛ばして変な質問ばかりしてやるつもりだ。まぁ妹は若干のブラコンで極度ファザコンなので、もし彼氏ができたら報告をしてくれるだろう。

失礼、話がそれた。

そんな父と妹だけど、今は一緒に住んでない。
別に複雑な家庭の事情とかではなく、単純に僕も妹も全寮制の学校に通っているからだ。
妹の顔を毎日見れないなんて悲しすぎて涙が出てくる。

嘘だ、
確かに寂しい気持ちにはなるが、流石に涙が出てくることはない。
というか、再開が一年前で実は八年間くらい会ってなかったのでぶっちゃけ接し方がいまいちわからなかったりする。

そして、その妹から電話がきた。
一週間に一度は電話でやりとりをするのが我が家の家訓になっている。
ただでさえ、家族同士で会うことが少ない我が家なので、父が家族とのコミュニケーションを増やすことを考えて考案したものだ。
……まぁ、妹はそんなの関係なくほぼ毎日父に電話しているようだが

さて本題だ

「すまん、もう一回言ってくれないか？　どうやら歳をとりすぎて耳が悪くなったみたいだ」
『私と二つしか違わないでしょ……だから今日ね、新しい担任が来たんだけどその先生が１０歳の少年だったの！　しかも外国人でめっちゃ可愛い！！』

ｗｈａｔ？　１０歳だと？　労働基準法とかどうなんの？　外人だからセーフって落ちか？
というか１０歳の少年にウチの妹を任せないといけないのか？　いやでもセクハラされることはないから逆に安心なのかな？　いやまて、１０歳ということを利用して逆にセクハラしまくるんじゃないのか？　子供だから許されるよレベルのセクハラをしまくってウチの妹にも被害がでたりして、ウチの妹は微妙に発育がいいから非常に心配なのだが……いや発育てきなことでの問題はないか、確かにウチの妹はとても可愛いが、可愛いが！（肝心なことなので二回言った）発育といった面なら妹とよく一緒にいる大河内さんのほうがすごい、あれで中学生とマジで半端ないというのに、それよりも上が妹のクラスにはいるというから驚きだ、一度クラス全体の写真を見てみたい気もする。

『もしもーし？　あー、妄想モードに突入しちゃったよ……まぁいいや、早くお父さんにも連絡しよ――――プツッ、ツーツー』

１０歳の時って僕何してたっけかなぁ、確かまだ麻帆良に入る前だから、近所の友達と一緒に遊んでいたよなぁ、妹も混じって川で魚を釣ったり、妹も混じってバスケしたり、妹にちょっかい出す馬鹿共に間接的ないやがらせをしたり、そういや僕っていつも妹と一緒にいたなぁ、中々いいお兄ちゃんをやっていたんじゃないだろうかってあれ？

「電話切れてるし」

この野郎、どうせ父さんに早く電話をしたいから切りやがったな、今度変な服装をしてあいつのクラスメートの前で明石裕奈の兄ですって言ってやる。そしてみんなから同情の眼差しを受けて変な空気になってしまえばいいんだ、ばーか

それにしても、十歳の先生かぁ……

麻帆良≪ここ≫に来るってことはやっぱり魔法使いってことになるのかな？　まだ、断定はできないけどその可能性は十二分に捨てきれないし。

というか一番気になるのは十歳で先生になれるほど頭がいいってことか、最低でも大学を卒業できるくらいは頭がよくないといけないから……ってうわ、考えるんじゃなかった、十歳の子に頭の良さが負けているのか僕は、いや大抵の人はそうなんだろうがそれでもかなりショックだ、気分的に。

「はぁ……夕飯でも食いに行くか」

やはり自炊できないってのは大分痛い、いやできないってわけでもないが料理をするのが楽しいと思えるような性格をしてないし、作っても皿洗いとかが面倒だし、そう考えると我が妹って偉大だと思う、母親の変わりに毎日料理作ってくれたもんなぁ、後片付けもしてくれたし……。

ああ手料理が恋しい

伏線が多い第一話（後書き）

主人公はシスコンです。

幽霊が見える男の第二話（前書き）

本編キャラ登場です。

幽霊が見える男の第二話

人は死んだら幽霊になる。

突然だが僕は幽霊が見える。

だからといって特に得したことはない、なんというか幽霊に色々な種類があってたまにグロテスクなのもいるし超怖いし、幼い頃の僕にとってはトラウマものだった、でも話してみると意外に優しかったりする人が多い、人間話せば分かり合えるもんだなと思う。ついでに魔法が使えるのと幽霊が見えることは大して関係がないらしい、だから妹はもちろんのこと、父さんにも見えないから昔は不思議がられた。

さて、本題だ。

僕の目の前には幽霊がいる。若干水色が混じった白髪に黒いセーラー服、顔立ちは整っている以外は幼くもなく大人びてもなく普通の中学生だ、個人的には幽霊でもこんな美少女と友達になれるのはかなりうれしい、うれしいのだが……。

「そんな羨ましそう目で見ないでよ、食べづらい」

「うぅ～、そんなこと言われましても……」

ちょっと半泣きになっているのを見ると若干罪悪感がわく、幽霊だから食べれないのは仕方がないけれども、だからって人の食事を妨害しないでほしい。

「というか、ここで食べろって言ったのさよちゃんじゃん」

「……だって、一人でいるのは寂しいんですもん」

うわー、抱きしめてー、幽霊だから無理だけど（幽霊じゃなかったら抱きつくのかというツッコミは禁止）

実はこの幽霊、６０年以上前からこの学校に住み着いているらしい、しかも見える人がいなかったので（または見えていても会話ができない）ほぼ６０年間誰とも話をしてないらしい。僕は暇だったので話しかけたら、驚かれて泣きつかれた。

いや、気持ちはわからないわけでもない、なんせずっと一人だったのだから急に話せる人がいたら泣きたくなるだろう、しかも学校外に出れないらしくこのファミレスまではギリギリ行けるらしい。なんで成仏しないのかがかなり気になるが追求するつもりもない、きっとなんか深い事情があるんだろう。

実は最初は同情して話を聞いていただけなんだけど、ちょくちょくこの付近で会って、流れで友達になった。幽霊だけど美少女だから友達になれたことはかなりうれしいからね。

「そういえば子供が先生になったって本当？」

「えぇ！　なんで知っているんですか！？」

「さっきまで裕奈と電話してたからね」

「あ、そういえば明石さんのお兄さんでしたね」

思い出したように両手を胸の前で叩くさよちゃん。

妹と僕は兄妹なのにあんまり似てない、いや別に全然似てないってわけでもないけどよく見ないとわからないくらいに似てない。僕も母親に似ればかっこよくなれたのかなーとか思わなくもない。

「で、その子供先生って、なんか変わってる所なかった？」

「変わっている所ですか？　うーん、そういえば、なんか大きな木の杖を持ってました」

「ぶっ！！」

「だ、大丈夫ですか！？」

思わず飲んでいたお茶を噴出してしまった。

目の前にさよちゃんがいたけど、幽霊だから普通に貫通する。

というか絶対魔法使いじゃねぇーかよ、そんなわかりやすすぎる物を持つなよ、違和感ありすぎだろ、自分は魔法使いですって言っているようなもんじゃねぇか。オコジョにされるぞ、オコジョに

「あ、あぁ大丈夫、大丈夫、それよりごめんね、いきなり噴出しちゃって」

「いえ、私は幽霊ですから大丈夫ですけど……」

そういって貫えると本当に助かる。

貫通するからといっても、顔にお茶を吹きかけられたらいい気分にはなんないからね。

それにしても魔法使いの子供先生かぁ、なんか裕奈が巻き込まれたらいやだなーとか思ってしまう。まぁいくらなんでもそれはないだろとも思う、いくら子供でもオコジョにされるのはいやだろうし、理事長もいざとなったらなんとか対処するだろ。

「じゃあそろそろ寮の門限だから僕は帰るね、また今度」

「はい、また今度」

さよちゃんに一声かけて、僕はレジへと向かう。

いつも通りのことだけど店員は僕のことを同情したような目で見てくる、まぁ仕方がないといえば仕方がないんだけどね、一人でブツブツ言いながら食べている人を見たらそりゃあおかしな人に見えるよな。別にそれほど気にはしないが……やっぱり若干気にして

しまう。

周りの目が気にしないでいられるほど、僕は強くないし

幽霊が見える男の第二話（後書き）

相坂さよを出した理由……なんとなくです。

買い物をする第三話（前書き）

本編キャラ４人登場

買い物をする第三話

ハーレムに少し憧れます。

女の子と買い物をする

それだけで僕のテンションはうなぎ登りだ。実は僕、妹以外の女の子と一緒に買い物に行ったことがない、いや正確には修学旅行とか学園祭とかの買いだしとかがあるが、その話はノーカウントということにしておこう。それを女の子と買い物したという数に入れてしまうとひどく惨めな気分になる。

だがしかし、ついに僕は女の子と買い物をするという快挙を成し遂げたのだ。

「お兄ちゃん、ボケッとしないでこれもってよ」
「おう」
「お兄さん、これもお願い！」
「あ、うん」
「おにーさん、これもお願いするわ」
「はいはい」
「明石のお兄さん、これもお願いします」
「あいよー」

うん、皆まで言うな。

休日の朝にわざわざ呼び出されて、新しく担任になった人の歓迎会の時に用意するプレゼントを買うためという名目で自分の服とか買っている妹とその友達の荷物持ちだとか、女の子と買い物という桃色っぽい言葉を頭の中で出しておかないと心が折れそうになる。

「すいません明石のお兄さん、荷物持ちなんてさせてしまって……」

「いーよいーよ、別に気にしなくたって。どうせ寮にいても暇だったし」

とはいってもやはり申し訳ないのか、頭を下げる大河内さん。

……めっちゃええ子や！

まぁ実際家にいてもすることはないのは事実だし、僕と違って部活で忙しい我が妹と会えるのは単純に嬉しくて樹液に誘われた虫のごとく、簡単に誘われてしまった僕が悪いのは言うまでもない。

まぁ流石に中二にもなって、兄貴と二人で買い物に行こうだなんて思わないか

それにしても、これは周りの人から見たら中々のハーレムではないのだろうか。

妹の裕奈はバスケットをやっていて引き締まっていて、しかも出る所はでているので中々のプロポーション、顔も僕とは違い母親似でこれまた母親からの遺伝である綺麗な黒髪をサイドテール（っていうんだっけ？）にしている、はっきり言うとかなりの美少女だ。

妹の友達その一の佐々木さんはプロポーションこそ我が妹に劣ってはいるが短いピンク色の髪をツインテールにしてとても可愛らしい

妹の友達その二の和泉さんもややプロポーションが弱いものの若干色素の薄い髪と目が妙に似合う顔立ちをしておりなんか保護欲をそそる。あと関西弁がいい

妹の友達その三の大河内さんはなんというか……中学生には見えないくらいの凄まじいプロポーションをしており、身長もあるので同級生にしか見えない、顔も大人びているので他の三人とは違って綺麗な美少女

むう、そう考えると荷物持ちくらい、何てことないかもしれない。

「そういえば、お兄さんって何の部活に入っているんですか？　裕奈と同じでバスケ？」

おそらく部活の話でもしていたんだろう、妹の友達その一の佐々木さんが話しかけてくる。

「いや、僕はそもそも部活動をしてないからね」

遊びでなら野球もバスケも好きだったけど、本気で打ち込もうと思ってないやつがその部活にいるだけで迷惑がられるんじゃないかなっていう懸念もあったし。

「へぇ、確かに体育会系には見えませんもんね、ひょろひょろだし」

「そのひょろひょろな男に荷物持ちをさせてるのは、どこのどいつだよ」

「あはは……」

佐々木さん……笑ってごまかすな、

他のメンバーも僕の声が聞こえていたんだろう、大河内さんと和泉さんは申し訳なさそうにしていて、裕奈は目をそらしている。

さっき謝ってきた大河内さんはもちろんのこと、佐々木さんや裕奈も流石に荷物持ちだけさせるのは悪いと思っていたんだろう、微妙に空気が重くなったような気がする。確かに妹たちが僕の休日を潰したのは事実だが、だからといって変に気を使わせるのも心苦しい。

「まぁでも、こんな美少女達に囲まれて買い物できるなんて人生に一度か二度あるかないかだからな、別に悪い気分じゃあないね」

「「「「……」」」」

しまった、ボケたつもりでらしくもない台詞を言ったのにフリー

ズさせてしまった、そういう反応が実は一番傷つく、というか自分で言っていて寒い。

「あ、あはははは、変なこと言わないでよお兄ちゃん！」

一番最初に動いたのは裕奈だった。僕の背中を全力で叩く、めちゃいてぇ……。

他の子達も固まった空気から開放されて苦笑いしていが、そのおかげで重くなりかけた空気は一切なくなった。

まぁ確かに半分は冗談だったけど半分は本気だ、もしこれがこの子達のような美少女じゃなくてむさい男だったら、僕は何かと理由をつけてを即座に退散する。魔法を使ってでも

その後も和気藹々とした空気で買い物をし、僕は妹たちを女子寮に送りそのままファミレスに来てさよちゃんと一緒に食事をしながら今日のことを話したら普通に羨ましがられた。

いい加減さよちゃんが不憫だし、何とかしてあげたいなーとか思う。

買い物をする第三話（後書き）

残念ながら寒いことを言っても桃色な空気にはなりませんでした。

しかし主人公っぽくないな、この主人公

ついでに作者はこの四人の中で一番、大河内さんが好き

オコジョに出会った第四話

わりと魔法は何でもありである。

魔法というのは奥が深い、大雑把に分けても攻撃、防御、捕縛、治癒、転移、などなどがあり、細かく言えば無数にあるとしか言いようがない、まぁでも普通は自分にあった魔法を１０個くらい覚えるだけで充分なんだけど、伝説とか英雄とか呼ばれる人は１００や２００を超える人がいるらしい、サウザントマスターと呼ばれてるナギ・スプリングフィールドなんてその中でも最たる者だろう

さて本題だ。

僕の前にはオコジョがいる、何故か寮の前で倒れてたのを拾ったんだが驚くこと人語が話せる、そしてタバコを吸っている、個人的には高校生の寮でタバコの吸殻が見つかると色々と問題があるのでやめてほしい、というかどこからタバコを出したんだろう？

まぁそんなことはどうでもいい、いや本当はどうでもよくはないけどツッコミ所が多すぎて僕には処理ができない次元のレベルだ。

「すまんオコジョ、もう一度言ってくれ」

ついこの間、裕奈にも同じ対応をしたと思うが気にしない、僕は万が一という可能性もあるので聞きなおしておく。

「だーかーらー、オレっちは兄貴であるネギ・スプリングフィールドを探してんだよ、あとオコジョじゃなくて、オレっちにはアルベール・カモミールって名前があるんだから、そっちで呼んでくれよ旦那」

はい聞き間違えじゃなかった、僕の耳は正常でした、だけど悲しい。
スプリングフィールドっていうことはサウザントマスターの血縁者と見てほぼ間違えないよな、というかそんな化け物レベルの人がわざわざこんな学校（まぁ世界樹があるけど）に何の用があるんだよ

「えーっとカモ、そのネギさんは今どこにいるかわかるの？」
「さぁ？　オレっちは兄貴がこの学校で教師をやっているとしか聞いてないから、でも最近この学校に来たのは確かな情報だぜ」

まぁよくこんな所に一人（いや一匹か）で来れたなって普通に関心するよ。
でも、そんなに執念があるのなら、もうちょい情報収集をしてほしかったなっていうのが本音、麻帆良って幼小中高大ってあって教員の数も相当多い、それを一々見て回るなんて相当骨が折れるし、唯一の救いは最近来たってことだな、それで大分絞られ――――って、最近来た魔法使いの先生？

「も、もしかして、ネギさんって１０歳だったりする」
「おお、知っているのか旦那」

はぁー、思わずため息がでる。これは幸運だったというのか不幸だったというのか、正直言うとそんなの無理だと言って適当に追い返そうと思っていたんだが、知っていることを教えないというのはなんか心苦しい、ここで僕が嘘を吐くという考え方もあるが嘘をつくというのは大小問わずにあまり好きではない。

「うん、正確にはどこの学校で働いているのかがわかった、ちょっと電話させてもらうよ」

「おう、よろしく頼むぜ旦那」

僕は携帯電話を取り出し、裕奈に電話する。

時刻は放課後、バスケ部の裕奈が電話に出る確率ははっきり言って五分五分だ

ガチャ

『もしもしー、どうしたのこんな時間に電話して？』

「あー、ちょっと確認したいことがあるんだけど、お前の担任ってネギースプリングフィールドって名前だったりする？」

『あれ？　名前を教えたことあったっけ？』

「いや言ってないと思うぞ、突然ですまんが今からその人に連絡を取れることは可能か？」

『たぶん明日菜の所にいるから大丈夫だと思うけど……』

「そうか、じゃあアルベール・カモミールさんが会いたがってるから図書館島に来てくれと言ってくれ」

『？　わかった』

「ありがとう、じゃあな頼んだよ」

『あ、うん、じゃあね』

ピッ

なんか無理矢理感は否めないが仕方がない、裕奈には魔法のことは秘密だから細かく事情を話すわけにはいかないし（細かく話したところでわからないと思うが）、あいつはわりと真面目だから頼んだことはすぐやってくれるだろう。

「よし、一応知り合いに連絡をつけて会えるようにしてもらったから行こう」

「おう、恩にきるぜ、旦那」

オコジョに貸しを作ってもあまり意味はないと思うが、まぁ感謝されて悪い気はしないし、魔法使いの少年先生というのはすこしばかり見たい気もするので、それほどいやではない。

ただ、図書館島まで行くのはちょっと面倒だとは思う。

オコジョに出会った第四話（後書き）

本編との違いについて

本編ではカモが直接女子寮に潜入してますが、今回は倒れてるカモを主人公が拾うということになってます。

相談に乗った第五話（前書き）

ネギがついに登場

相談に乗った第五話

生きてることは平等である、しかし才能は平等ではない

僕はこれでも魔法使いなので、変わっている人というのも何度も見たことがあり、そのたびに色々なことを感じていた。その感じたことが正しかったことも間違っていたこともあったけど、僕が見た中ではこの少年はトップに入りそうなほど異質だ。

髪が赤いとか顔立ちが可愛いとかそんなものは関係ない。ただそこにいるだけで存在というものを感じられ、その存在にひきつけられるような感覚が芽生える。

別に魔法とかを実際に見たわけじゃない。

別に優秀さを見せ付けられたわけでもない。

ただなんとなく適わないと感じだ。

ただなんとなくこの存在を信じたくなった。

それがネギ・スプリングフィールを見た時の僕の感想だ。

「どうかしたんですか？」

「あ、いや、なんでもない」

不思議そうに僕を見上げるネギ君。（さん付けはやめてと言われた）

ネギ君がカモを連れてきてくれたお礼にと図書館島の近くにある喫茶店でコーヒーをご馳走になっている、なぜかネギ君に睨まれたような気がする。

「それで、これからどうすんの？」

ネギ君のとなりに座っている神楽坂明日菜さんがこれからのことを聞いてくる。
神楽坂さん、左右で違う色の瞳（ドレットアイだっけ？）でオレンジ色の長い髪をツインテールにしており、鈴がついた髪止めが印象的なとても可愛い子だ……というか裕奈のクラスって可愛い子が多くないか？　今のところ、美少女にしか会ってないような気がするけど。

で、僕たちは喫茶店で何をしているかというとネギ君に相談された、ついこの前ネギ君は吸血鬼に襲われているのでどうにかしたいらしい、個人的には吸血鬼なんておとぎ話程度にしか思っていなかったので、話し合ったところで解決策なんてそう簡単には出ない。

「やっぱり、普通に理事長とかに相談したほうがよくないか？」
「そうしたいんですけど、釘をさされてしまって……」

顔を伏せて落ち込むネギ君。
そういった対処をされるのは当然といえば当然だよな……、見た目はただの老人にしか見えないけど、なんかすごい魔法使いらしいし理事長

「なるほどな……フフッ、でも安心しろや、それならいい考えがあるぜ、兄貴」
「えっ！」
「何かあの二人に勝つ方法があるの！？」

ネギ君と神楽坂さんは二人そろって身を乗り出す。
ネギ君が認識阻害の魔法を使っているため、カモ君が喋っても問題はないがやはり動物が喋るというのはすごい違和感があるな。

「ネギの兄貴と姉さんがさくっと仮契約して、片方を二人がかりでボコっちまうんだよ」
「ぼ。僕とアスナさんが仮契約ー！？」
「あの、仮契約って……？」
「あー簡単に言うと、魔法使いとキスをして魔法を使えるようにするってこと」
「えー！！　何それ！？」

うん、いくら認識阻害の魔法がかけられているからって叫ばないでほしい、周りの視線が痛いって……というかこれって僕が喋っているように見えるのかな？

「いや、僕も仮契約をするのは賛成だよ、戦うにしても逃げるにしても戦力が大きいに越したことはない」
「で、でも……」
「ちょ、ちょっと私はイヤよ、なんでネギなんかとチューなんてしないといけないわけ！？」

神楽坂さんの意見はごもっともだ、思春期真っ只中の中学生が十歳の子供にキスをしたいとは思わないか。まぁでも、ネギ君は十歳とはいえ顔がかなり整っているし、ちょっとキスするくらいなら別に構わないような気もするが、そこら辺は個人の考えの違いだろう
たかがキス、されどキスか…

「ああ、もしかして姉さんは、中3にもなってまだ初キッスを済ませてないとか……？」
「なっ……！？」
「フフフ…いやこれは失礼、じゃあ仮契約と言えど抵抗あるでしょーな…」

「なっ……何いってんのよ！？　チューくらい別になんでもないわよっ」
「じゃＯＫということで、兄貴はどーする？」
「ううっ……」
「コ、コラ、人の話をちゃんと……」

うわー、見事に口車に乗せられてるよこの子。カモの口がうまいのか、この子が単純なだけなのか、それとも両方なのかはわからないけど、僕にはあまり関係のないことだから別に口は出さない。

「わ、わかった！　僕もやるよ！！」
「よっしゃ、そーこなくっちゃ！！」
「えーー！？何勝手に決めてんのよー！」
「お…お願いします、アスナさん！　一度だけ！！　一度だけでいいですから！！」
「……もうっ、ほ、本当に一度だけだよ？」

お、交渉が成立したみたいだな、今の発言を聞くだけだと案外神楽坂さんって押しに弱いのかもしれないな、まぁ十歳だからってこともあるんだろうけど

「解決策は見つかったみたいだし、僕はそろそろ帰らせてもらうよ」
「あ、はい！　カモ君のことありがとうございました！！」
「いえいえ、じゃあそっちも大変だろうけど頑張ってね……あ、そうだ」
「はい？」
「明石裕奈のことを今後ともよろしくお願いします、あいつは魔法使いの関係者じゃないけどいい奴だからこれからも良くしてやってください」

僕は深々とお辞儀する。
なんか娘を嫁に出した親のような言い方だけど、まぁ気にはしない。見た目は十歳だけど先生という職についているのだから、これくらいは言っとかないと

「え、えっと、もしかして明石さんの……」
「はい、兄です」

そう言って今度こそ僕は立ち去る。
なんか後ろでうわ全然似てない！　とか聞こえてるけど気にしちゃいけない、今更のことだし。

はぁ、キスとかあんまり良い思い出がないなぁ……

相談に乗った第五話（後書き）

本編との違い

時系列が少し違いますが大して変わることはありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1089y/

ヨワイマホウツカイ

2011年11月1日00時19分発行